

小学校英語における発音指導について

池 中 雅 美

1. はじめに

今夏、2004年8月13日、筆者は金沢市の小学校教諭の研修会に参加する機会が与えられた。金沢市教育委員会が行った、金沢市教職員研修会の「小学校英語科指導講座」の講師として参加したのである。「音声学の立場から小学校英語を」というタイトルで、北陸学院短期大学英語コミュニケーション学科長澁谷良穂教授がなされた講演後の演習部分のお手伝いをさせていただいた。

金沢市は平成16年に小中一貫英語教育特区に認定された。平成8年から小学校に英語活動を導入し、平成14年からは「総合的な学習の時間」に英語教育がなされてきた背景がある。この「総合的な学習の時間」には、小学校英語教育が週1時間実施されてきた。そして、これを中学校につなげることによって、豊かなコミュニケーション能力を身につけ、金沢の文化を世界に紹介できるまでになるよう、「世界都市金沢」の人材を育成することが目的となっている。「総合的な学習の時間」で行われていた英語活動から教科としての英語指導へと動いている。その中で指導にあたる中心的存在となるのは、ALT、英語指導講師、EAA、そして小学校学級担任である。中でも学級担任が大きな役割を担うことはすぐに推測できることである。

今回の研修会は、平成16年度に計画されている十数回のうちの一つの講座である。実際に英語の授業を担当するであろう小学校教諭の方々を対象とし、英語の重要な要素である、音声に注目し、音声学という学問の見地からの講義、演習がなされた。

この研修会終了後のアンケートをもとに、今、小学校教諭が求めているものは何か、英語の授業に必要だと思われることは何かを整理し、小学校での英語科指導における発音指導の必要性、重要性について探りたいと思っている。

2. 研修の内容

研修は午前と午後にわたり一日行われた。午前には、始めに澁谷教授より「音声学の分野から小学校英語指導者に必要な英語力」というタイトルで講演がなされた。音声学とは何か、なぜ音について学ぶのかということから講義は始まった。より通じる発音を目指すためには、個々の音の基本的な作り方を知る必要がある。すぐにきれいな発音ができるようにならなくても、きれいな発音、通じる発音を目指す姿勢が大切であるという点が強調された。また、発音記号を使うことには、一つの音に一つの記号が対応しているというメリットがあることを理解し、カタカナでは表記が難しい日本語にない英語の音を、発音記号のまま習得する利点が話された。

筆者が関わった講演後のワークショップは、少人数で行う意義を考え2つのグループに分かれて行われた。ハンドアウト(北陸学院短期大学での英語音声学の授業で使用しているものをもとにして作成されたもの)を用いて、母音、子音の個々の音の作り方の説明をし練習を行った。鏡を用いて個々の音の作り方、口の形を確認しながら、繰り返し口に出して練習し、隣りに座ったもの同士でペアになってさらに練習を重ねた。

午後は、参加者全員が一つの部屋に集まり、澁谷教授によるストレス、リズム、イントネーションといった項目についての講演から始められた。英語のリズムが作られるもととなる強勢(ストレス)について、強勢がおかれる基本パターン、また、イントネーションのパターンなどについて話された。英語の強勢(ストレス)は等間隔で現れる傾向があることが、英語のリズムを作っているということを実感してもらうために例文を挙げ、実際に発音してみた。その例文は以下のものである。

1. I don't think I can do it.
2. I shouldn't have thought I could do it.
3. I shouldn't have thought it possible to do it.

それぞれの文章で3箇所強勢(ストレス)を受ける語があり、それが等間隔で現れるため、文章の長さが違っていても言い終わるのは同じであるという体験であった。

この後の2つのグループに分かれてのワークショップでは、ジャズチャンツと歌を取り入れて行なった。ジャズチャンツは「Major Decision」を選び、絵のフラッシュカードを用いて行なった。歌は「To the Rain」を選び、リズム、ストレスの練習を行った。ジャズチャンツも歌もテープを用いてネイティブの英語を聞き練習できるようにした。また、子ども向けのジャズチャンツの紹介、手遊びのある歌についても触れた。

3. アンケート結果

一日の研修会を終え、小学校の各先生方に書いていただいたアンケートを読ませていただいた。このアンケートによると、全体的にこの講座・研修に対する評価は、「よかった」、「このような講座がまたあればよい」という感想が多かったことに現れているように思う。このことは、参加された小学校教諭の方々が、音声に関する講座・研修が必要であると感じているということが示されているのではないかと思う。音声学という学問を、小学生に直接教えるということはないとしても、教える側が音声学の知識をある程度持って指導にあたるかそうでないかでは、指導に違いがでてくるのではないだろうか。小学校という段階においては文字を導入している、あるいはフォニックスを導入して指導を行っているところはまだ少ないのではないだろうか。つまり、聞いたり、話したりすることが主な活動であり、教師が発する一つひとつの言葉、音声、そして児童に発話させる

言葉、音声は活動の中心となる。指導法、教材などと同様に、教師と児童との間で行われる音声でのやり取りを重視していかなければいけないと思われる。

3.1 小学校担任教諭を対象とした英語音声学の研修会・講座の必要性

今回のアンケートで書かれていた感想の大部分を占めていたのは、このような音声学の講座に参加してよかったという声である。中には大学等で専門的に学ばれ、忘れていたことを思い出された方もいらっしゃるが、本格的な発音の指導は受けたことがないという方までいらっしゃる。実際に授業で英語の指導にあたるのは、ALT、英語指導講師、EAAと学級担任となるであろう。チームティーチングの組み合わせは様々あるだろうが、学級担任ははずれることはないはずである。それゆえ、ALT、英語指導講師、EAAが英語を話す、使うのであるから学級担任は英語を発話する必要があるということにはならない。小学校担任は子どもの普段の様子を知っていて子ども一人一人の性格なども把握しているのであるから、英語の授業での中心的役割を担うのは必然的である。

実際に、金沢市の公立小学校での研究授業を拝見させていただいたことがある。学級担任がほとんど日本語を使わずに英語でALTとのやり取りをしていた学校もあれば、学級担任はALTと児童との間を取り持つような役割を果たし、英語を使っていたのは児童にさせる活動のデモンストレーションの時だけという場合もあった。後者の学級担任のやり方でもやはりまったく英語を話さないということはないのである。

英語のリスニング力をつけるためには多くの時間をかけて英語を聞かせることが必要であると思う。多くの時間が望めないならば、せめてきれいな発音を聞かせることができないだろうか。ALTだけではなく、学級担任の発話は、児童が聞き模倣する対象となるものであるから、教師も発音に気をつける姿勢が必要になってくると思う。今回のような研修・講座が、小学校教諭の方々のさらなる動機づけとなり、きれいな発音、通じる発音を目指す姿勢作りに役立つものであったとするなら成功であったと言えるだろう。

ただ、一日の研修としては非常に量が多かったのは事実である。これだけの内容を数日に分けて行うことによって消化不良にならずに知識を吸収していただき、また定着も図ることが出来たのではないかと思う。

3.2 英語音声学の基礎的知識の必要性

筆者が通常短期大学の授業において、英語音声学の授業で扱っている項目は、母音、子音の個々の音の調音方法、調音位置、強勢（ストレス）、リズム、イントネーション等である。もちろん発音記号を用いての指導を行っている。

短期大学の学生で、中学や高校で発音記号を学習してきた者はあまりいない。読み方のわからない英単語が出てきた場合、その単語の上にカタカナでルビをふったことがあるという学生も多い。しかし、英語音声学の授業で発音記号を半年、あるいは1年学習することにより、読み方がわからない単語を読む時に、カタカナよりも発音記号のほうが便利、有効であると感じる学生が多いこと

が、筆者のアンケート（1998年実施）によってわかっている。

この点からも発音記号を学習することは有益であると言える。しかし、小学校の英語で発音記号を学ぶことは必要ないと思うが、指導する立場にあるものが、知識として英語音声学を学習しておくことは大切なことではないだろうか。指導するものがよく似た音の違いを認識しながら発話することで、正確なモデルを提示できるからである。子どもたちにとって模倣のモデルとなる教師の言葉、音声は非常に大きな位置を占めている。

また、英語独特のリズムを習得することも非常に大切であると思っている。個々の音が正確に発音できることも大切であるが、リズムにのって発話することにより重きがおかれなければならないのではないかと思う。自分の言いたいことを表す内容語に重きを置いて英語のリズムにのせて発話されるほうが、個々の語の発音は正確だが平坦な話し方よりも相手に理解されやすいということがある。それぞれの言語にあるリズムを習得することは言語学習において必要不可欠の項目であると思っている。何を相手に伝えたいのか、自分の言いたいことがきちんと伝えられるようにするためには、ストレスをどの語に置けばいいのかということを知っていたほうがより意思疎通が図りやすくなるのではないだろうか。細かな音の違いは確かに大切である。きちんと異なった発音ができることは、コミュニケーションにおいて多々ある誤解を生じるのを防ぐことができるからである。しかし、ある程度は文脈の中で何をいわんとしているのかが理解されると思うので、伝えたいという気持ちの方を先行させ、リズムに乗って発話がなされたほうがいいのではないかと考える。

リズムに乗るためにはストレス以外に音声の変化についても取り上げなければならない。リンキング、同化、脱落などといった音声変化についての知識も必要である。こういった音声変化も英語のリズムを作る要素の一つとなっているからである。一語一語を別々にとらえるのではなく、数語を一つのかたまり、つまりチャンクとしてとらえさせ声に出して言わせるほうが効果があると考えられる。

英語音声学の知識は、指導者が知っているということがより効果的な指導につながれると考える。発話内容、つまり文の意味と密接に関係している発音の指導に、音声変化の現象や知識を活かした指導が望まれる。

3.3 小学校教諭が求めているもの

今回の講座・研修に対するアンケートの結果によると、参加者のほとんどから「よかった」という評価をいただいている。また、「小学校の教諭も児童の前で正しい発音で話すことが大切であると再認識した」という意見もあった。今回の研修は一日のみでかなり多くの資料をもとに研修がなされたため、「何日かにわけてゆっくり研修したほうが定着もいいのではないか。」という意見もいただいた。確かに、今回使用した資料は筆者が勤務する短期大学での英語音声学の授業で、2年間を通して取り上げる項目を網羅したような資料であるので、量的には非常に多く、資料の全てをこなすには時間も足りなかったのは事実である。発音の指導のために必要な知識を系統立てて研修を行うのであれば、やはり一日ではなく数日に分けてなされるほうが望ましいという点が第一に挙げられる。

第二に、資料の中で取り上げた単語についてであるが、「小学校で使っていく単語を多く取り入れたほうが、ただ意味もわからず発音するよりも実践にうつせたのではないか。」という意見があった。短期大学で使用しているものをこの研修のために単語の入れ替えを行ったが、小学校で使う、教える単語をもっと吟味しより多く取り入れるべきであった。即実践にうつせるような研修内容を検討する必要を感じた。

第三に、研修の後半（午後）で行ったジャズチャンツや歌については、「楽しかった」、「授業で取り入れてみたい」という意見であった。手遊びや歌を通して英語の音やリズムを楽しむ、楽しみながら英語を学ぶということが、英語学習において大切な部分であると思われる。特に小学校低学年においては英語嫌いを作らないためにも楽しく授業が行うことで、より強い動機付けをねらいとすることも可能になるとと思われる。そのためにも、教師自身が楽しく活動することが望ましいであろう。

4. 発音指導について

幼児は聞いた音をそのまま再生する能力が高いと言われている。聞いたとおり模倣をすることによって、英語独特のリズム、イントネーション、発音を身につけていくことが容易にできる可能性が高い。「実践家からの児童英語教育法」(アプリコット)の中で中本幹子氏は、「10歳を過ぎると子音のあとに母音をつけて発音したり、日本語にない音を聞いた時、一番近い音を持つ日本語に置き換えて発音する傾向が増します。これは左脳の発達によって、より分析的に言語を捕らえるようになるからだと言われている。」と触れている。こういった傾向が10歳を過ぎると増すということであるが、筆者が幼稚園での英語活動のアドバイザーとして子ども達の活動を実際に見ているが、幼稚園の年中、年長の年齢でさえ日本語の代用音に置き換えて発音されていると感じることがたびたびある。この傾向が10歳を過ぎるとより強くなっていくとするならば、幼稚園の年齢から小学校低学年までの間にきれいな発音を聞かせる必要がある。

発音指導はどのように行えばよいのか。通常筆者が関わっている幼稚園などで行っている活動においては、新しく導入する単語を指導者が発音し、それを聞かせ発音させるという方法をとっている。普段の活動の中で、[f]などの発音については指導者の口をよく見るように言葉かけを行うことがあるが、口の形、舌の位置などを細かく指導することは特に行っていない。音声学を学問として教える必要は幼児、小学生にはないと思うが、英語を発音させるときには何らかの形で意識をさせる必要があるのではないだろうか。幼稚園児でもすでに母語を発音するために必要な口のまわりの筋肉などがある程度できあがってきているように思われる。母語を習得するのとは違って、日本という環境の中で、また学校という組織の中で、英語を聞いたり話したりする実質的時間が少ない子ども達にとって、量を多く聞かせるだけを目指しても、この問題が解決するとは思わない。授業を始める前に口の体操のようなものを行って、今から英語の授業が始まるという準備をする姿勢を作らせるというのはどうだろうか。口の周りの筋肉をほぐして英語を発音させる準備となるよう、口の体操は、日本語の音にないものを選び、リズムに乗せて行う方法を検討してみたいと思っている。

池 中 雅 美

さて、カタカナについてであるが、すでにカタカナで知っている言葉などは、聞いたとおりに発話になされず、カタカナで代用した発音になっているということが多々見受けられる。カタカナで知っていることが語彙の意味を理解する点でカタカナが有利に働くという利点はあると思うが、カタカナはやはり日本語の表記であるので、発音という面に関しては取り入れるべきではないと考える。日本人の英語で通じればいいのではないかという意見もあるだろうが、指導するものとしては目標となる言語のきれいな発音を目指させることが理想であると思う。

5. 小学校における発音指導の今後について

金沢市が小中一貫英語教育特区となったことで、小学校3年生以上に年間35時間の「英語科」が設置される。この標準指導時数35時間以外に週に1回以上15分程度のショートタイムによる指導の実施が含まれてくる。今年度は移行時期となっており、次年度平成17年度からは完全実施となっている。ただ単に時間が増えるだけではなく、「英語科」としての授業となるのである。このような環境の中で学級担任の小学校教諭の果たす役割は非常に大きいということは明らかである。

今年度筆者は、金沢市公立小学校での英語の授業を参観する機会が数回与えられた。ALTと担任の先生のチームティーチングであったが、指導の仕方はそれぞれ異なっていた。担任教師もほとんど日本語を使わずに授業がなされていたところと、担任教師がALTと児童との橋渡しの役割をし、日本語を使用していたところがあった。小学校担任の役割もそれぞれの学校によって異なっているだろうが、学級担任は特区認定となったことで「指導講師、インストラクターと簡単な英語で会話し、学習者としてのコミュニケーションモデルを示す」という分担が当てられている。モデルとなるとすればやはりきれいな発音で児童に示すことができれば、より大きな効果が期待されるはずである。児童に対してもそうであるが、筆者の経験から言えることは、きれいな発音を習得するには、モデルとなるきれいな発音を聞き、声に出して練習することである。つまり音読をすすめる。児童の場合には文字の導入などとの関連もあるが、小学校の学級担任の先生方がきれいな発音を目標とするならば、音読が効果的であると思う。

今回担当した講座は、さまざまなテーマを掲げて、継続的にまた定期的になされているものであると思われるが、指導するものから指導されるものの気持ちを理解する上でも、このような研修会に参加することには意義があると思う。今回講座を担当させていただいたことに感謝し、今後もこういった金沢市の取り組みに目を向けていきたいと思っている。

参考文献

- 中本幹子 2003 「実践家からの児童英語教育法」国際コミュニケーション能力を育てるために
解説編